

取り立て詞「だって」について

—とりたて表現の体系における「も」「でも」との対照—

蓮 沼 昭 子

要 旨

「も」と「だって」は「同類」の用法を共有するのに対し、「でも」と「だって」は「逆条件」の用法を共有する。「逆条件」とは、「XならばP」というXの属性から当然に期待される事態Pが否定され「XであってもPでない(～P)」が表す関係のことだが、Xに「一度」「少し」のような「(最)小量」を表す副詞的成分が使用された場合に、「でも」と「だって」は顕著な対照性を示すことがある。すなわち「最低限のレベルを容認しつつ事態の(非)実現を希求する」話し手の譲歩的態度を表す発話では「でも」のみが使用され、「だって」は使用不可能である。一方「最低限のレベルでさえ実現していない」ことに対する話し手の不満や反発を表す発話では、「でも」も使用不可能ではないが、「だって」が選択される傾向が強い。「だって」は、話し手の謙遜や譲歩的姿勢を表す発話では使用不可能な点で、「でも」と鋭く対立しており、こうした用法上の制限は、「自己正当性の主張」という「だって」の機能特性から説明可能である。

キーワード：意外 当然 極限性 逆接性 社会通念 自己正当性の主張

1. はじめに

本稿は、蓮沼(2003)(以後「前稿」と呼ぶ)を引き継ぎ、その新たな展開を目指すものである。前稿は、取り立て詞¹⁾の「だって」と類義的な用法をもつ「でも」「も」を対照させ3語の相違を分析したものだが、「とりたて表現」の体系で各語が占める位置に対する大局的な観点が欠落しており、考察も断片的であった。

近年、日本語のとりたて表現の体系化が進み、それを土台に日本語と外国語のとりたて表現の対照研究の成果が一冊の書籍(野田(編)2019)として出版されるまでに進展を遂げている。本稿は、こうした新たな研究の成果に刺激を受け、と

りたて表現の体系に占める「だって」の用法特性を明らかにすることを目的とする。「も」に対する研究の豊富さに比べると、「だって」「でも」を取り上げた研究の数は限られており、その中でも、口語的な「だって」を本格的に分析した研究は少ない。前稿は、映画「男はつらいよ」のシナリオの例を使い分析を行ったが、本稿では、大規模コーパスの用例も参照し、前稿よりも観察対象の範囲や量を増強し、3語の間に潜む本質的な相違の解明を目指す。

本稿の構成は次の通りである。2節では問題の所在を指摘し、3節では先行研究を概観し本稿の課題を提示する。4節では用例の分析を行い、5節では分析結果に対する考察を行う。6節は全体のまとめである。

2. 問題の所在

最初に、本稿の問題のありかを具体的に示す用例を観察しておきたい。(1)(2)は3語のすべてが使用可能な例だが、残りの(3)~(9)は、2語、あるいは1語のみが使用可能な例である。

- (1) 最近は男 {も/だって/でも} 家事や子育てをする。
- (2) 国語の先生 {も/だって/でも} 漢字を忘れることがある。
- (3) 俺 {も/だって/*でも} 人の子だ。(同類)
- (4) あんなことを言われれば、腹 {も/だって/*でも} 立つわ。(当然)
- (5) 先生：昨日は、授業中、漢字をど忘れしてしまって、困りました。
学生：先生 {も/*だって/でも} 漢字を忘れることがあるんですか？
(意外)
- (6) いくら俺 {*も/だって/でも} モーツァルトぐらいは知ってるよ。
(逆条件)
- (7) 向こうから一度 {*も/だって/でも} 挨拶されたことはない。
((最)小量の非実現)²⁾
- (8) こんな俺 {*も/*だって/でも} お役に立てればうれしいよ。(譲歩)
- (9) 少し {*も/*だって/でも} 休んだほうがいいよ。
((最)小量の実現希求)³⁾

表1は、(1)(2)を除いた7例における、用法と3語の容認度の対応関係を整理したものである⁴⁾。

表1 「も」「だって」「でも」の用法の対応関係

例文番号	用法	も	だって	でも
(3)	同類	○	○	×
(4)	当然	○	○	×
(5)	意外	○	×	○
(6)	逆条件	×	○	○
(7)	(最)少量の非実現	×	○	○
(8)	譲歩	×	×	○
(9)	(最)少量の実現希求	×	×	○

○使用可能 ×使用不可能

「も」「だって」「でも」に対する容認判断のパターンの別に基づき、表1について簡単に解説を行っておこう。

まず、(3)(4)は、「も」「だって」が使用され、「でも」が使用不可能な場合である。(3)「同類」とは、「～だけでなく～も」と類義的な、当該事態と類似の事態が他にもあることを示す用法、(4)「当然」とは、「ひどいことを言われれば、腹が立つのも当然」といった意味を表すものである。

(5)「意外」は、(5)の学生の発話に認められる「先生が漢字をど忘れするなんて意外だ」という意味で、「も」「でも」が使用され、「だって」が使用不可能な場合である。

(6)(7)は「だって」「でも」が使用され、「も」が使用不可能な場合である。(6)「逆条件」は、「モーツァルトなど知らないだろう」という聞き手の想定に対し、「いくら教養のない俺でも、モーツァルトぐらいは知っている」という逆接的な条件関係を表すもので、聞き手の思い込みに対する話し手の反論の意図を表す。(7)「(最)少量の非実現」は、「一度という最小の回数でさえ挨拶されたことがない」という意味のことである。(6)(7)は、聞き手や世間の思い込みに対する反発や、最低限のレベルも実現されていないことに対する不満など、期待との食い違いに対する話し手の反論を表すという共通性をもつ。

(8)(9)は、「でも」のみが使用可能な場合である。(8)「譲歩」は、「大した能力もない俺でも、役に立ちたい」というふうな、自分の能力を低く評価する話し手が、謙遜の姿勢で事態実現に対する願望を控え目に述べるものである。(9)「(最)少量の実現希求」は「少しだけでも休んだほうがいい」と聞き手に行為を実行するよう控え目に助言する例である。(8)(9)は、望ましい事態実現に対する話し手

の控え目な願望・要求を表すという共通点をもつ。

今「だって」と「でも」に注目して表1の判定結果を観察すると、次のような特徴が指摘できる。

- 1) 「だって」は「当然」の用法をもつが、「意外」では使用されない。
- 2) 「だって」は、「逆条件」「(最)少量の非実現」では、「でも」と用法を共有する。
- 3) 「だって」は、「譲歩」と「(最)少量の実現希求」では使用不可能なのに対し、「でも」はそれが可能であり、2語は対極性を示す。

本稿の究極の目的は、「だって」が上記の特徴を示す理由の解明だが、その前に、「だって」の用法特性、および「も」「でも」との相違に対する本稿の主張を先取りする形で、以下に示しておきたい。

本稿の主張

1. 「だって」は疑問文には使用不可能である。一方、「も」「でも」はそれが可能である。
2. 「同類」の用法は「だって」と「も」が共有するが、「だって」は、例外として扱われているXについて「Xも同類に含まれるべきだ／はずだ」という、「も」にはない反駁的なニュアンスをもつ。
3. 「逆条件」は、社会通念や話し手・聞き手の共有知識を背景に「XならP」という関係が予想・期待される場合に、予想・期待に反する「XであってもPでない(～P)」という関係を表す。この用法では「でも」と「だって」が互換性をもつ。
4. 「意外」は、特定の対象について話し手が抱く信念と現状が食い違っている場合に生じる話し手の心的反応を表す用法である。この用法には「でも」「も」が使用され、「だって」は使用されにくい。
5. 「だって」は、「当然」の用法をもつ。極端な状況や例外的な属性をもつ人物や事態に対し、別の社会通念や基準の適用により「極端・意外な現状も見方を変えれば当然である」と捉え直しを行うような場合の用法である。「だって」「も」が使用されやすいが、文脈が整えば「でも」も使用可能である。
6. 「だって」と「でも」は、発話意図の相違により使い分けが見られる。すなわち、「だって」は話し手の不満、非難・反論の意図を表す発話で選択される傾向が強いのに対し、「でも」は、控え目な期待・要求を表す譲歩的表現で選択される傾向がある。

7. 「例示」は、候補として典型的・適切な一例を選択例示する「でも」の用法だが、「だって」はこの用法をもたない。「でも」とは対照的に、「だって」は例外として排除されている X を P の候補に入れるべきだとする話し手の主張を表す。
8. 「だって」は、話し手が自己正当性を主張する発話で使用されやすい。異議申し立て・反論のニュアンスは、「だって」がもつ対話性から発生する意味である。

次節では、先行研究を概観し、「とりたて表現」の体系での 3 語の位置を確認し、本稿が解明すべき課題をいっそう具体的な形で示しておきたい。

3. 「とりたて表現」の体系における 3 語の位置づけ

最初に「とりたて表現」の最新の体系的な研究である、野田（2015, 2019）を紹介し、そこでの 3 語の位置を確認しておく。次に 3 語をめぐる主要な先行研究を紹介し、本稿が解明すべき課題を具体的に提示する。

3.1 野田（2015, 2019）の「とりたて表現」の体系

表 1 は、野田（2015, 2019）の「とりたて表現」の分類⁵⁾を土台に、それと日本語記述文法研究会（編）（略称を「日記研編」とする）（2009）の「とりたて助詞」の分類の対応関係を整理したものである（「意味」の欄の〈 〉内は日記研編の分類名である）。本稿が観察対象とする「だって」「でも」「も」を太字ゴシックで示す。なお、「だって」は野田の表にはないが、用法に対する判断に基づき筆者が追加したものである（網掛で示す）。

表2 とりたて表現が表す意味の分類 (cf. 野田 2015 : 84, 2019 : 9)

意味	とりたて助詞の例	意味	とりたて助詞の例
限定 〈限定〉	だけ ばかり しか (こそ (特立))	反限定 〈ほかし〉	でも (例示) も (柔らげ) なんか (例示)
極端 〈極限〉	まで (意外) さえ (意外) も (意外) でも (意外) だって (意外)	反極端 〈評価〉	なんて (低評価) ぐらい (最低限) (こそ (譲歩))
類似 〈累加〉	も (類似) だって (類似)	反類似 〈対比〉	は (対比)

表2で明らかのように、「も」「でも」「だって」は「極端」の欄の「意外」と「類似」の欄の「類似」の用法を共有するが、「だって」は「反限定」(例示)、「でも」は「類似」⁶⁾の用法をもたない点で、相違をもつことが指摘できる。

3.2 先行研究での3語の位置づけ

取り立て詞の「も」に対する研究の豊富さと比べ、「でも」「だって」を体系的・対照的な観点から取り上げた研究はあまり多いいとはいえない。管見の限りでは、丹羽 (1995), 定延 (1995), 蓮沼 (2003), 菊地 (2003), 井島 (2007), 日本語記述文法研究会(編) (2009), 三枝 (2015) が知り得た研究である。以下の表3は、「も」「でも」の先駆的研究である、沼田 (1986), 定延 (1995) の用法分類に対し、筆者の内省に基づき「だって」での置換の可否の判定結果を示したものである (cf. 蓮沼 2003)。日記研編 (2009) の分類名も添えておく。

表3 「も」「でも」の用法分類と「だって」による置換の可否 (cf. 蓮沼 2003)

	沼田 (1986)	定延 (1995)	蓮沼 (2003)	日記研編 (2009)	「だって」による置換の可否	例文番号
も ⁷⁾	単純他者肯定 (も ₁)	基本的なモ	同類	累加	△	〈1〉
	柔らげ (も ₃)	色々のモ 通念のモ	色々 通念	ほかし	× ×	〈2〉 〈3〉
	***	当たり前のモ	当然	***	○	〈4〉
	意外 (も ₂)	意外のモ	意外	極限	△	〈5〉
	***	確定回避のモ	概数	***	×	〈6〉
でも	***	単なる意外のデモ 譲歩のデモ 逆接のデモ	意外 逆条件 ⁸⁾ 逆接	極限 逆条件節 ***	○ ○ ×	〈7〉 〈8〉 〈9〉
	選択的例示	確定回避のデモ	例示	ほかし	×	〈10〉

○置換可能 △置換可能だが制限がある ×置換不可能 ***言及なし

表3の用法分類に対し、それぞれの代表的な例文を挙げておく。A)「も」の用法に対する「でも」「だって」による置換の可否、B)「でも」の用法に対する「だって」「も」による置換の可否、という2つの場合に分け、〈1〉～〈10〉の例文における3語間の置換可能性に対する筆者の内省判断を示す(表3では「だって」の場合のみ示す)。以下にA) B) それぞれの場合について例文を挙げ、各例に対する筆者の容認判断を示す。必要に応じ、例文の後の()内に取り立てられた格成分を添えておく。

A) 「も」の用法に対する「でも」「だって」による置換の可否

- 〈1〉同類：a. 田中さんは弁護士だが、奥さん も/*デモ/ダッテ 弁護士です。
 b. 学生時代にはいろいろなことを経験したい。外国語 も/*デモ/?ダッテ 2か国語以上マスターしたいし、留学 も/*デモ/ダッテ 経験したい。
- 〈2〉色々：その日は天気 も/*デモ/??ダッテ 良かったので、公園は家族連れでにぎわっていた。
- 〈3〉通念：息子 も/*デモ/*ダッテ 大学を卒業しました。
- 〈4〉当然：時給800円で交通費なしでは、学生 も/*デモ/ダッテ ヤ

ル気をなくすわ。

〈5〉意外：国語の先生 {も／デモ／ダッテ} 漢字をど忘れすることがある。
(ガ格)

〈6〉概数：5人 {も／*デモ／*ダッテ} 入ればこの店は満杯になる。

B) 「でも」の用法に対する「だって」「も」による置換の可否

〈7〉意外：a. こんな難しい問題は先生 {でも／ダッテ／モ} 解けない。

(ガ／ニ格)

b. 先生 {でも／*ダッテ／モ} 解けない問題があるんですか？

(ガ／ニ格)

〈8〉逆条件：たとえ雨 {でも／ダッテ／*モ} 試合は決行する⁹⁾。

(仮説的≒雨であっても)

〈9〉逆接：明日は日曜日 {でも／??ダッテ／*モ} 出勤しなければならない。

(事実的≒日曜日だけれど)

〈10〉例示：お茶 {でも／*モ／*ダッテ} 飲みませんか。(お茶か何か)

次の表4は、蓮沼(2003:255)の表3から「概数」の用法を除き、3語の用法の対応関係を整理したものである。「逆条件」は「譲歩」からの改称名である(cf.注8)。

表4 取り立て詞「も」「だって」「でも」の用法の対応関係(蓮沼(2003)の表3を改変)

	色々	通念	当然	同類	意外	逆条件	逆接	例示
も	○	○	○	○	○	×	×	×
だって	×	×	○	△	△	○	×	×
でも	×	×	×	×	○	○	○	○

蓮沼(2003)で明らかになった事実を以下に簡条書きで整理しておく。

- 1) 「色々」「通念」は、「も」のみが有する用法である。
- 2) 「逆接」「例示」は「でも」のみが有する用法である。
- 3) 「当然」「同類」では、「も」「だって」に互換性が認められる。
- 4) 「逆条件」では「だって」「でも」に互換性が認められる。
- 5) 「意外」では3語に互換性が認められる。

以上の観察結果に基づき本稿の課題をまとめると、分析が必要なのは、表の太

枠線で囲んだ部分の、2語、あるいは3語の間に互換性が生じることの理由と、それぞれの相違、および用法成立のメカニズムの説明である。

本稿では、以下の5つを課題に掲げ、うち③④⑤の分析に取り組むことにする(①は前稿でほぼ説明済みである。②については稿を改めて論じたい)。③～⑤については、取り上げる節番号を()内に示す。

- ① 「同類」の「も」と「だって」の相違点
- ② 「でも」の使用の可否を左右する条件
- ③ 「意外」の見直し(4.1)
- ④ 「当然」の用法特性(4.2)
- ⑤ わずかな数量と「でも」「だって」(4.3)

4. 分析

4.1 「意外」の見直し

「意外」は、通常「XならP」が成立することが予想・期待されている場合に、「XでさえもPでない(～P)」のように、予想・期待と食い違う結果が成り立つことを意外と捉える場合の用法である。評価をめぐる社会通念の上でXが極端な性質をもつ場合に成立する用法として、〈極限性〉という尺度概念と関連づけて説明されることが多い。ただし、〈極限性〉の表示を基本的機能としてもつのは「さえ」「でさえ」であり、「も」「でも」「だって」が表す極限性は、派生的・語用論的なものであるとされる(菊地2003)¹⁰⁾。

「意外」は名詞句Xの極限性とは独立に規定する必要があると考えるが¹¹⁾、ここではその手始めとして、以下の2例における「だって」の容認度の違いを観察し、「意外」という概念に対し再検討を試みることにしたい。

(1) 国語の先生 {も/だって/でも} 漢字を忘れることがある。

(2) 先生：昨日は授業中、漢字をど忘れしてしまって、焦りました。

学生：先生 {も/*だって/でも} 漢字を忘れることがあるんですか？

(1)と(2)の学生の発言はよく似た構造をもつが、(1)ではニュアンスの違いはあるものの、3語がすべて使用可能である。一方、(2)の学生の発言では「だって」が使用不可能である。こうした「だって」に対する容認度の違いは何ゆえに生じているのだろうか。

(1)は、通常漢字を忘れてしまわないはずの国語の先生でも漢字を忘れることがあるという一般的記述である。一方、(2)は先生の発言を受け「先生にもそんなことがあるのか」と軽い驚きを込めた発言である。意外な事実を知り驚くことが「意

外」の特徴だとすれば、(1)にはそうした意味での意外性は希薄なのに対し、(2)は本来の意外性が表されている発言といえるだろう。

(1)と(2)が表す意外性は本質的に異なるものである。すなわち、(1)に認められる意外性は、「先生」の属性に対する社会通念と食い違う事態の矛盾関係の認識に基づくものだが、こうした意外性は、当然性に容易に転換可能である。すなわち「人間誰だってど忘れすることはある」といった別の社会通念を引き合いに「それも当然」と捉えるような場合である。(1)では、選択された取り立て詞によってもニュアンスの相違があり、「でも」を使用した場合は「意外」への傾斜が見られるのに対し、「も」「だって」では、「当然」への傾斜が感じられる。

(2)の学生の発話で「だって」が使用不可能なのは、「だって」は疑問文では使用不可能という統語的制約が最大の原因だが、原因はそれだけではない。学生の発話の「先生」は、「先生」という職業の人一般を指すのではなく、目の前の聞き手である「先生」を指しており、社会関係が対等であれば「あなた」で呼ぶことが可能な対象である。つまり(1)と(2)の「先生」は、「先生」という職業一般と、特定の聞き手である「先生」という、まったく異なる対象を指示する表現なのである。

以上の観察からの結論として、本稿は「だって」の機能を「XとPの結びつきを「当然」の関係と捉える話し手の態度を標示する」ものと考えておきたい¹²⁾。疑問文や新たに認識した事態に対し「だって」が使用不可能な理由は、「だって」の機能を以上のように把握することによって説明可能である。(1)で「だって」が使用可能なのは、一般的事態の記述では参照する社会通念により「当然」の解釈が可能だからである。一方、(2)の学生の発話は、新たに認識された特定の事態を表すものであり、「当然」の解釈が与えられる余地はどこにもない。「だって」の使用が不可能なのはそのためである。

4.2 「当然」の用法特性

「当然」とは、「極端な事態Rが原因ならばX {も／だって} P」のような条件文の後件の要素に「も」「だって」が続く場合の用法で、Pは望ましくない事態である場合が多い。「も」「だって」はこの用法で互換性をもつ。

(3) 一日一食ならば、腹 {も／だって} 減るさ。(定延 (1995) の例を加工)

(4) 時給 800 円で交通費なしじゃ、学生 {も／だって} ヤル気をなくすよ。

(同上)

(3)(4)における「当然」の意味は、「尋常でない事態が原因であれば、意外な現

状もその当然の結果だ」といった、別の常識の適用により、意外性から当然性へ意味の転換が起こっているケースと考えられる。これは「例外的な X も同類の要素として認定されるはずだ／べきだ」という「同類」の「だって」が条件文の後件で使用された場合に生じる意味と捉えることが可能で、「も」にも同様に認められる意味である¹³⁾。

なお、「当然」の意味は、上記のような条件文の後件に限らず、文脈環境が整えば、単文の「だって」「でも」「も」でも表すことが可能である。すなわち、常識に照らせば当然に P が成り立つという意味をもつ、次の(5)がそうした例である。

- (5) 「だいたい、いまどき畳針状の凶器なんてももの自体が、珍しいでしょう。
中学生だってバタフライナイフくらい持っていますよ」

(PB29_00416 21020 北森鴻『闇色のソプラノ』)

(5)は常識に疎い聞き手に対し「常識をわきまえば分かって当然のこと」として話し手がそれを教示する発話である。こうした文脈では、「だって」「も」ばかりでなく、「でも」によっても「当然」の意味を表すことが可能である。ただし「当然」のニュアンスは、3語の中で「だって」に最も強く認められるように思われる。

4.3 わずかな数量と「でも」「だって」

本題に入る前に、疑問語と少ない数量を表す語 (Q で示す) への後接における、「でも」「だって」「も」の特徴を整理しておきたい。結論からいえば、「でも」「だって」は、肯定形述語になじみ否定形述語とは結びつきにくいのに対し、「も」はそれと反対の振る舞いを示す。寺村 (1991:136-137) による「Q + モ」「Q + デモ」と述語形態の共起テストに「だって」を追加し、Q に「だれ」「一人」「少し」が使用された例を以下に挙げる¹⁴⁾。

- (6) a. だれ {でも／だって} {よい／できる／*よくない／*できない}。
b. だれも {*よい／*できる／よくない／できない}。
(7) a. 一人 {でも／だって} {よい／できる／*よくない／*できない}。
b. 一人も {*よい／*できる／よくない／できない}。
(8) a. 少し {でも／だって} {よい／できる／*よくない／*できない}。
b. 少しも {*よい／*できる／よくない／できない}。

(6)~(8)の a の例が示すように、「でも」「だって」は述語の肯定形と共起し、否定形には使用されにくいという共通性をもつ。

ところで、上記とは異なり、少ない数量に続く「でも」「だって」が、話し手

の発話意図の違いで顕著な対照性を見せる現象がある¹⁵⁾。すなわち、「でも」は「低レベルを許容しつつも、事態の実現（非実現）を望む」といった、話し手の控え目な願望・要求を表す表現で使用される傾向をもつものに対し、「だって」は「低レベルでさえ実現していない」という否定表現と高い頻度で共起するという現象である。

まず、「でも」の使用が自然で「だって」が不自然となる例から観察しておこう。以下は「希望」「勧め」「命令」「禁止」「必要」といった表現が続き、事態の実現（非実現）を控え目に望む話し手の意図を表す例である。「でも」の使用は自然だが、「だって」はいずれの例でも不自然で容認不可能である¹⁶⁾。

- (9) 一目 {でも / ?? だって} あなたに会いたい。(希望)
 (10) 一晩だけ {でも / * だって} 泊まっていてください。(勧め)
 (11) 一瞬 {でも / ? だって} 目を離すな。(禁止 = 「離さない」ことを命令)
 (12) 少し {でも / ?? だって} 邪魔にならないようにしなさい。(命令)
 (13) 少し {でも / ?? だって} 早く解決しなければならない。(必要)

次に「だって」の使用が自然で、「でも」が不自然となる例を見ておこう。用法は異なるが、参考までに「も」も選択肢に挙げておく¹⁷⁾。

- (14) 一日 {だって / でも / # も} 君のことを忘れたことはない。
 (15) 彼女には指一本 {だって / でも / # も} 触れたことはない。
 (16) 一度 {だって / でも / * も} 面会に来たことがあるか？

(修辞疑問 = 来たことはないだろう)

少ない数量を表す語に「だって」が後接する場合は、否定表現を伴う例が圧倒的に多く、「最低限のレベルでさえ実現していない」という話し手の非難や不満感を伴う表現が使用される。この場合の「だって」は、内省では「でも」での言い換えが可能のように思われるが、コーパスの「でも」の使用例を観察すると、「だって」に見られるような否定表現との顕著な共起傾向は観察されず、内省と使用実態にはかなりの隔りがあることが確認できる¹⁸⁾。

5. 考察

4節での分析で観察された、「だって」と「でも」が対照性を見せるケースについて考察を加えておきたい。取り上げたいことは、1) 少ない数量に「だって」「でも」が続く場合の対極性、2) 「当然性」生成のメカニズム、の2点である。

5.1 少ない数量に「だって」「でも」が続く場合の対極性

「でも」が「だって」と対極性を見せるのは、少ない数量を受けて、「最低限のレベルを容認しつつ(非)実現を希求する」、話し手の控え目な態度を表す表現の場合である (cf. 例(9)~(13))。「だって」はこうした表現では使用されない。

「でも」が上記の譲歩的態度を表す表現で使用される理由は、「X テモイイ」という許容表現と実現の希求・要求を表す文類型の関係から説明可能である。「X テモイイ」は、X が名詞の場合は、「N₁でも N₂でも (N_nでも) いい」といった形をとり、複数の選択肢が許容されるという意味を表すが、「一+助数詞+でもいい」は、最小限であってもそれを許容するという意味を表す。「一目でもあなたに会いたい」を例にとれば、「一目でもいいからあなたに会いたい」という意味であり、最低限のレベルでの実現を容認し、控え目な願望を述べるものである。

一方、「一+助数詞+だって」は「一度だって挨拶がない」のような否定表現と結びつく傾向が強く、「最低限のレベルでさえ実現していない」という話し手の不満や非難を表す表現で使用される¹⁹⁾。つまり、(最)少量を表す副詞的成分を受ける場合、「でも」「だって」は正反対ともいえる話し手の態度を表しており、この2つを単なる文体的変種の類義語として扱っては、その本質的相違を見落とす結果になってしまうのである。

少ない数量に「でも」「だって」が続き、話し手にとって望ましい事態のPが続く場合の「XでもP」と「XだってP」の相違は、次のように説明が可能である。すなわち「XでもP」は「たとえ最低限のレベルであってもPの(非)実現を希求する」という、Xと未実現の事態Pの仮定的逆接関係を表すのに対し、「XだってP」は「最低限のレベルでさえPが非実現」という、Pが非実現の現実的事態を表している点である。つまり、この2つは事態の「非現実性」(=仮定性)と「現実性」という点においても対極性をもつことが指摘できるのである。

5.2 「当然性」生成のメカニズム

「当然」の用法は、「極端」「例外的」「非常識」な属性をもつ人や物に対し、「例外も同類」「極端も普通」「非常識も常識」といった関係を認め、「例外的・極端な属性も、結局は常識・平均に回帰する」といった捉え直しが行われた場合に生じる意味の転換現象である。「だって」の例でこの点を確認しておこう。

「だって」は、世間や聞き手の誤った思い込みに対する反論や自己主張の発話で使用される傾向が強いが、以下はそれが見取れる例である。(17)は単文の1人称のガ格、(18)は逆条件の接続形式、(19)は条件文の後件の3人称のガ格が取り立てられた例だが、いずれの例にも当然性のニュアンスが感じ取れる。

(17) あたしだって忙しいのよ。

(18) いくら俺だってモーツァルトぐらい知ってるよ。

(19) 時給 800 円で交通費なしじゃあ、学生だってヤル気なくすよ。

(17)は「あたしも人並に忙しいのだ」、(18)は「俺にも常識程度の知識はある」という風に、例外的、平均以下のレベルであるとして同類から排除されている人物が、「自分も世間並であり、同類として扱われるべきだ」と反論している例である。(19)は「極端に労働条件が悪ければ、期待に反した学生の反応も当然」といった意味を表す。「も」および条件を整えば「でも」によっても上記のニュアンスは表現可能だが、「も」「でも」とは異なり、「だって」には「当然」の意味が焼き付けられているように感じられる。

6. おわりに

今後の課題を述べ、本稿を締めくくりにしたい。最大の課題は「意外」「逆接性」の概念の精密化と、それと取り立て詞の各用法の関連性の分析である。もうひとつは「でも」に認められる「逆接性」「譲歩性」を談話のレトリックの観点から捉え、現実の談話例の観察を通しその表現構造を明らかにすることである。残した課題②とともに、引き続きこうした課題に取り組み、とりたて表現研究の精密化と深化を目指したい。

注

- 1) 日本語のとりたて表現の品詞分類上の名称は、「副助詞」「係助詞」「とりたて詞」「取り立て／とりたて助詞」等、さまざまなものがあるが、本稿では「取り立て詞」を使用する。ただし、このカテゴリーの品詞としての当否に対する判断は、前稿と同様、保留する。
- 2) 「一度 {だって／でも} ~ない」は「一度という少ない回数でさえも~ない」という意味なのに対し、「一度も~ない」は、回数がゼロという意味であり意味が異なる。つまり「も」は文法的には使用可能だが、同じ意味では使用不可能という意味で「*」と判定している。
- 3) 星野 (2020) のデモの3用法のうちの「(最)小を意味する副詞的成分」に「でも」が後接する「C デモ」に該当する用法である。「一+助数詞」「少し」などに「でも」が続く場合だが、「少し」は「最小」とは言えないため、「(最)小量」と表記する。
- 4) (1) (2)で3語がすべて使用可能なのは、異なる用法の解釈を許す文脈の想起が可能だからである。
- 5) 表2は、野田 (2015) の表1、野田 (2019) の表1を合体したものである (ただし野田 (2015) のスペイン語の例は省略)。また、野田 (2019) の表では野田 (2015)

の表に挙げられていた「こそ（特立）」と「こそ（譲歩）」が語例から除かれているが、本稿の表2では残し、() に入れそれを示す。なお、野田の表の右の列のラベルに使用されている「反～」が「左の列のラベルと意味の肯定・否定が逆転する関係にはなっていない」（茂木 2019）点には注意が必要である。個々の「とりたて助詞」の意味については、日本語記述文法研究会（編）（2009）で挙げられている例文や意味ラベルなどを参照されたい。

- 6) 野田（2015, 2019）の「類似」は、「単純他者肯定」（沼田 1986）、「基本的なモ」（定延 1995）、「累加」（日記研編 2009）と呼ばれる「も」の用法に該当すると考えられる。本稿の表3も参照されたい。
- 7) 沼田（1986）と定延（1995）の「も」の用法の対応関係は、井島（2005a）を参照している。ただし、井島は定延の「当たり前」を沼田の「柔らげ（も₃）」に対応する場所に位置づけているが、適切とは思われないため、表3では点線で区切りそのことを示した。
- 8) 前稿で「譲歩」と呼んでいた用法を、本稿では「逆条件」に改称し、表3ではそれを反映させている。本稿では「譲歩」を、一步退いた話し手の控え目な態度を表す「でも」の用法に使用することにしたためである。「逆条件」の「でも」は、名詞述語「Nダ」のテモ形に該当する活用形だが、「だって」はこれと互換性をもつ。「も」は逆条件では使用されないため、「でも」「だって」が使用され、条件的意味を表す例を「逆条件」に分類する。ただし、「Nでも」「Nだって」が、格成分の取り立てか逆条件節かの違いは連続的で、区別が困難なことが多い。
- 9) 「雨でも」は、「（天気が）雨だ」という名詞述語の逆条件形に該当する。「雨」は、主節述語「決行する」との間にガ格・ヲ格といった格関係をもたないため、逆条件であることが分かる。「だって」は「だ」を構成要素にもつため、逆条件に使用可能だが、それをもたない「も」は使用不可能である。
- 10) 菊地（2003）は、〈極限系のとりたて〉に使用される代表的な現代語として「さえ」「でさえ」「すら」「ですら」「まで」「も」「でも」「だって」を挙げている。前半の4語は極限性を表すのが基本的機能であるのに対し、後半の4語は他の用法からの派生、あるいは語用論的に極限性を表すことがある語であるとしている。
- 11) 井島（2007）は、〈意外〉〈極限〉の違いを次のように説明している。すなわち〈意外〉は「そんなことは起こらないだろうという否定的な期待に対して、肯定的な事態が実現すればよいのであって、背後に〈並列〉のような複数性、あるいはスケールは必ずしも必要としていない」（p.57）とし、次のような単一の事態を表す例では、「が」の使用が適切で、サエ、マデ、デモ、ダッテ、モが不適切になることをその根拠に挙げている。

i) あんなに汚い多摩川にアザラシ |が/*さえ/*まで/*でも/*だって/??
も| 住みついた。（下線の付加は蓮沼）

一方、〈極限〉については、スケール上の〈極限〉である必要は必ずしもなく、「複数の事態のうち、〈実現可能性〉の極端なもの（最も高いものあるいは低いもの）にサエ、マデ、デモ、ダッテおよびモが用いられる」（p.58）と捉えるのが妥当である

とし、当面は2者を併せ〈意外・極限〉と概略的に規定しておく旨が述べられている。

- 12) 井島 (2007) は、〈意外・極限〉の表現には、〈実現可能性〉の最も低い事態が実現する (最低可能性実現) 場合と、それが最も高い事態が実現しない (最高可能性非実現) 場合があるとし、前者の場合の例として次の例を挙げている (下線の付加は蓮沼)。

i) 花子は下着に {?? さえ／まで／でも／だって／も} アイロンをかける。

筆者の「だって」に対する観察に基づけば、i) で「だって」が選択された場合は、「意外」よりも「当然」の意味に傾くように感じられる。例えば「花子は家事に几帳面だから、下着にも、もちろんアイロンをかける」といったニュアンスである。

- 13) 表3に対する解説として注7で指摘した通り、井島 (2005a) は、定延 (1995) の「当たり前のモ」(本稿の「当然」の「も」) を沼田 (1986) の「柔らげ (も₃)」の下位に位置づけているが、本稿では「単純他者肯定 (も₁)」(本稿の「同類」の「も」) の派生的用法に位置づけるのが適切だと考える。

ちなみに、「当然」の「も」「だって」と共通する意味をもつ複合辞として「V {テモ / タッテ} オカシクナイ」という構文がある。例えば「自然・当然」の意味を表す「こんなずさんな管理では、いつ事故が発生してもおかしくない」がそうした例である (蓮沼 2020)。

- 14) 「いつ」「どちら」「どこ」など、使用される疑問語によっては例外もある。その詳細については、寺村 (1991: 136-137) を参照されたい。
- 15) 少ない数量は「一度」など最小量を表す「一+助数詞」が代表的だが、数字は必ずしも一とは限らない。例えば「1000円でも賃上げしたい」では、1000円が月給の賃上げの額としてはわずかな額であるとして使用されている。大きい数量に「でも」「だって」後接する場合は、用法上の差異は特にないようで、両者は互換性をもつ。この場合、最大の数量は「いくらでも／だって」が表すことになる。

i) 大スターと二人きりでディナーショーが楽しめるのなら、百万円 {でも／だつて} 出すよ。

- 16) なお、このことは筆者の内省にとどまらず、本稿が観察したコーパスの例でも、このタイプの表現で「だって」が使用された例は観察されていない。
- 17) 選択肢にある「# も」は、文法的には可能だが、用法が異なることを表す。例えば「一日 {だって／でも} 忘れたことはない」は、「一日という短い時間でさえも」という意味なのに対し、「一日も忘れたことはない」は、忘れた日がゼロであることを表し、意味が異なる。
- 18) 「少ない数量 Q」に続く「でも」は、「Qでも X ならば P」のように、「Qでも」の後に仮定条件が続く例が目立つ。以下の i) ii) がそうした例で、このタイプの「でも」も、「だって」での言い換えは不自然で、「でも」のみが使用可能な場合と考えられる。どちらの例も、主節で否定評価や警告など、望ましくない事態が述べられており、(9)~(13)のような、望ましい事態実現に対する希求とは対極的な表現である。

i) たとえ犯罪事実の一部でも認めてしまえば、公判で覆すのは、きわめて困難だ。

(和久峻三『禁断の館殺人事件』PB19_00432 3890)

ii) いいか、一寸でも命令にそむいたら一ト突きだぞ。

(三島由紀夫『三島由紀夫全集』PB29_00679 66590)

なお、「でも」「だって」が「譲歩・同類かつ題目」を兼ねているような場合は、「にしても」「にしたって」が使用可能とされる(丹羽 1995, 2006。丹羽の「譲歩」は本稿の「逆条件」に該当)。ⁱⁱⁱ⁾の「だって」がそうした例に該当すると考えられるが、置換可能と判断される他の語を片仮名表記で追加しておく。

iii) [イタリアの郵便局が話題] それから葉書一枚 |だって/デモ/ニシテモ/ニシタッテ| 窓口の人間によって料金がちがう。(村上春樹『遠い太鼓』OB3X_00023 57120)

ⁱⁱⁱ⁾ の下線部は「葉書一枚が話題の場合も」といった意味であり、「葉書一枚だって」に対し「題目」の解釈が可能な例である。「にしても」「にしたって」で置換が可能なのはそのためだと考えられる。

- 19) 「一度だっていい」のように、最小量に「だっていい」が続く例は、手元のコーパスの検索例には 1 例も存在しない。また、「だっていい」を文字列検索した結果では、「どうだっていい」「何だっていい」「どっちだっていい」など、疑問語に続き、投げやりな態度を表す例が目立つ。

参考文献

- 井島正博 (2005a) 「モの機能と構造 上」『武蔵大学人文学会誌』36(3): 137-162
井島正博 (2005b) 「モの機能と構造 下」『成蹊大学文学部紀要』45: 31-60
井島正博 (2007) 「サエ・マデ・デモ・ダッテの機能と構造」『日本語学論集』3: 45-82
東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
川村三喜男 (1983) 「デモ・ナド」『意味分析』pp.54-56 東京大学文学部言語学研究室
菊地康人 (2003) 「現代語の極限のとりたて」沼田・野田(編)(2003) pp.85-105
三枝令子 (2015) 『語形から意味へ 機能中心主義へのアンチテーゼ』くろしお出版
阪田雪子 (1971) 「だって」「でも」松村明(編)『日本文法大辞典』pp.435-436, pp.531-532 明治書院
定延利之 (1995) 「心的プロセスからみたモ、デモ」益岡ほか(編)(1995) pp.227-260
高木千恵 (2012) 「大阪方言のとりたて形式カテについて」『阪大社会言語学研究ノート』10: 66-77
高木千恵 (2017) 「大阪方言の接続助詞カテについて」『阪大社会言語学研究ノート』15: 36-58
高梨信乃 (2010) 『評価のモダリティ 現代日本語における記述的研究』くろしお出版
寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
富樫純一 (2005) 「複合助詞「にしろ」「にせよ」「であれ」—その意味と諸用法をめぐって—」『筑波日本語研究』10: 1-18
日本語記述文法研究会(編)(2009) 『現代日本語文法 5 第9部 とりたて』くろしお出版
丹羽哲也 (1995) 「「さえ」「でも」「だって」について」『人文研究』47(7): 25-51 大阪市立大学

- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題日文』 和泉書院
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』 pp.105-225 凡人社
- 沼田善子・野田尚史(編)(2003) 『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異—』 くろしお出版
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造から見た主題ととりたて」益岡ほか編 (1995) pp.1-35
- 野田尚史 (2015) 「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系」『日本語文法』 15-2 : 82-98
- 野田尚史 (2019) 「とりたて表現の対照研究の方法」野田(編)(2019) pp.3-20
- 野田尚史(編)(2019) 『日本語と世界の言語のとりたて表現』 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1995a) 「談話接続語「だって」について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』 8 : 265-281
- 蓮沼昭子 (1995b) 「対話における確認行為:「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」 仁田義雄(編)『複文の研究(下)』 pp.389-419 くろしお出版
- 蓮沼昭子 (2003) 「取り立て詞「だって」について—「も」「でも」との比較を通して—」 『姫路獨協大学外国語学部紀要』 16 : 251-268
- 蓮沼昭子 (2020) 「くよくよしたってしょうがないよ」『日本語教育連絡会議(2019) 論文集』 Vol.32 : 44-61
- 蓮沼昭子 (2021) 「テモイイ」と「タッテイイ」『日本語教育連絡会議(2020) 論文集』 Vol.33 : 24-42
- 星野佳之 (2020) 「現代語の副助詞デモの各用法について—いわゆる「譲歩」「極端」と「例示」の関係について—」 日本近代語研究会(編)(2020) 『論究日本近代語』 第1集 pp.375-389 勉誠出版
- 前田直子 (1993) 「逆接条件文「～テモ」をめぐる」 益岡隆志(編)『日本語の条件表現』 pp.149-167 くろしお出版
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』 くろしお出版
- 工藤 浩 (2016) 『副詞と文』 ひつじ書房
- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)(1995) 『日本語の主題ととりたて』 くろしお出版
- 茂木俊伸 (2019) 「とりたて表現の研究動向」野田(編)(2019) pp.21-38
- 森山卓郎 (1998) 「例示の副助詞「でも」と文末制約」『日本語科学』 3 : 86-100
- 藪崎淳子 (2017) 「「取り立て」再考」『日本語教育』 166 : 15-30
- 藪崎淳子 (2020) 「「極限」とは」『追手門学院大学国際教養学部紀要』 13 : 29-43
- 山中(澤田)美恵子 (1991) 「「も」「でも」「さえ」の含意について」 日本語と中国語対照研究会(編)『日本語と中国語の対照研究』 14 : 25-39

調査資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

(はすぬま・あきこ, 姫路獨協大学名誉教授・創価大学名誉教授)